

「農業技術の匠」：^{さいとう やしのり}齋藤 彌志則さん （青森県弘前市）
～ 強勢台木マルバカイドウ台を用いた高品質多収生産の確立 ～



齋藤 彌志則さん

1 技術確立の背景（目的）

一般的に、りんご栽培では、高品質多収を実現するために、わい化栽培が勧められています。しかし、齋藤さんの園地がある山手の積雪地帯では、わい化栽培だと樹体が小さく、枝の位置も低いことから雪害に見舞われることが多くなっています。

そのため、強勢台木であるマルバカイドウ台を用いて、積雪地帯においても、高品質安定多収を可能とする栽培の確立を目指しました。

2 技術概要（技術効果）

安定多収を実現するために、大樹に仕立て、成らせる枝と成らせない枝を用意するとともに、一度成らせた枝は連年で成らせないことで、充実した花芽を常に確保します。

また、葉枚数の確保と着果量の制限を徹底することで、果実糖度は、通常より約2%高い14%を実現しています。

この技術の確立により、通常りんご生産で行われる葉摘みをしない、いわゆる葉とらず栽培に応用し、着色等の外観より味を重視したりんご生産を実現しています。

3 技術の地域への活用状況（普及状況）

青森県りんご協会が主催したりんご剪定士養成事業において、3期9年に渡り、講師を務め、50名以上の剪定士を育成するなど、担い手確保と剪定技術の継承に尽力しました。

また、事業終了後の現在も直接指導を受けるために、毎年100名以上の生産者が来訪するとともに、県外へも指導に赴いています。



余裕を持たせて仕立てた樹体

※最寄りの普及指導センター

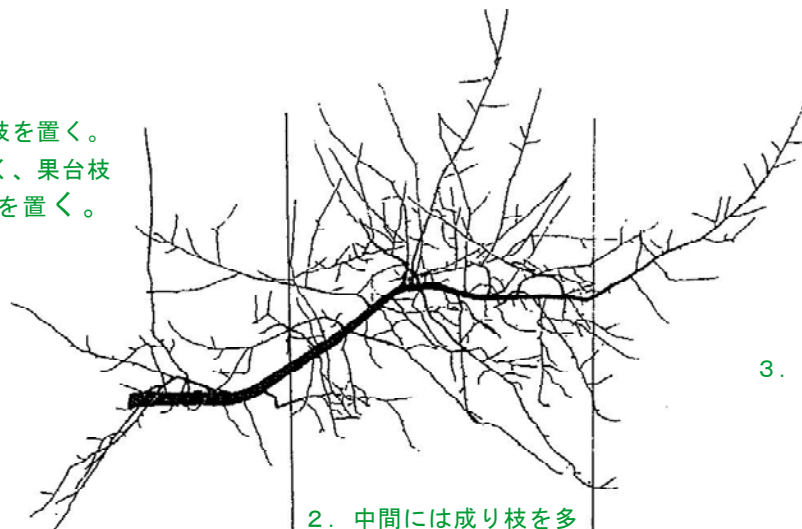
青森県中南地域県民局地域農林水産部普及指導室
住所：青森県弘前市蔵主町4
TEL：0172-34-2136

<技術のポイント>

余裕を持った樹づくりで、高品質安定多収生産

- ① 通常、りんごの樹形は主枝、亜主枝、結実母枝(成り枝)、結実枝で構成されるが、本技術では、亜主枝を設けずに主枝に直接、成り枝を着生させる。
- ② 成り枝は、主枝の中央部には大きな成り枝を、先端部と基部には小さな成り枝を着け、内部まで日光が到達する枝づくりを行っている(ダイヤモンド方式と称す)。
- ③ 今年成らせた(着果させた)枝は、連年で使用せず、枝を1年休ませることで、充実した花芽を確保する。充実した花芽であるため、果実が大きくなり、果形もよい。
- ④ そのため、今年成らせる枝と成らせない枝を同時に配枝する。
- ⑤ 結果的に枝量が多くなるため、摘果を徹底し、生産量は10a当たり4~5tに制限する。
- ⑥ 糖度を始めとする味のよい果実の生産には、葉枚数が重要であることから、結実枝を間延びさせないように肥培管理を徹底し、単位枝長当たりの葉枚数を十分に確保している。このことから、果実糖度は、ふじで通常より約2%高い糖度14%を実現している。
- ⑦ また、葉枚数を十分に確保できる管理方法であることから、通常りんご生産で行われる葉摘みをしない、いわゆる葉とらずりんご栽培に応用している。
- ⑧ 葉とらずりんご栽培では葉摘み作業が省略できることから、作業時間が短い秋において、省力化につながっている。
- ⑨ 樹冠を十分に拡大させた大樹仕立てのため、新梢の伸びが止まるのが早く、早期に成葉となり、病害虫に加害されやすい若い葉や枝が少ないことから、結果的に病害虫防除や徒長枝整理などの管理作業が軽減されている。
- ⑩ 十分な樹冠の拡大と生産量の制限により、樹体に余裕を持たせ、数十年にわたる高品質安定多収生産を実現している。

1. 元には小枝を置く。
徒長枝ではなく、果台枝
による下り枝を置く。



3. 先端は軽くする。

2. 中間には成り枝を多く置く。ここで樹勢をコントロールする。

ダイヤモンド方式に仕立てた主枝のイメージ図